

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

現代イタリア事情 -Italia oggi- 第11回

* イタリア人と働くということ *

立元 義弘

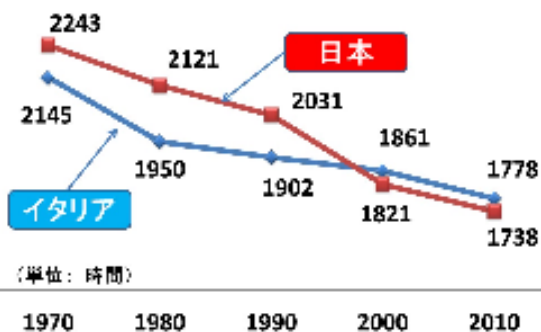
一般的に日本人の間では、dolce vita(甘い生活)を謳歌するのに忙しく、仕事については怠け者というイメージで見られることの多いイタリア人ですが、今回はそのイタリア人の働きぶりについて書いてみたいと思います。多分に私見も交えたものですので異論もあろうかと思いますが、18年半にわたってイタリア人の上司・同僚・部下と働いた一日本人ビジネスマンの経験談としてお読み頂ければ幸いです。

まず、イタリア人の名誉のために言っておかなければならないのは、イタリア人が怠け者でいい加減という評価は決してあたらないということです。確かに家族を中心としたプライベートライフを大事に考えるイタリア人は、家庭を顧みないで昼夜を問わず身を粉にして働く日本人の姿に、憐れみこそすれ共感を抱くことはないと思いますが、彼らは決してイソップ寓話のアリとキリギリスのキリギリスではありません(余談ながらこの寓話、イタリアではアリとセミになります)。私が一緒に働いた多くのイタリア人たちもそれぞれ自分の仕事に対するきちんとしたモラルを持ち、必要であれば自発的な残業や休日出勤も厭わず、責任を持って仕事にあたってくれました。働き者でありながら仕事とプライベートのどちらも犠牲にすることなく両立させる術を心得ているイタリア人の生き方は、私たちが大いにお手本にすべきでしょう。

右のグラフは日本とイタリアの総労働時間数の推移を比較したのですが、2010年のイタリア人の年間総労働時間が1778時間であるの対

し日本人は1738時間で、イタリア人の方が日本人より1週間分ほど労働時間が長いという結果になっています。他の先進国と同様、両国とも労働時間の減少傾向がずっと続いていますが、とりわけ、かつてはエコノミックアニマルと呼ばれ、労働時間も世界のトップレベルにあった日本は、1990年代以降の経済成長鈍化を受けて時短が急速に進みました。そしてその結果、1998年を境に日本とイタリアの総労働時間の関係はずっと逆転しているのです。もちろんこのデータには、日本では多く見られ、イタリアではほとんどないであろう、いわゆるサービス残業は含まれていませんので、これだけで単純な労働実態の比較はできませんし、ましてや、両国民の“勤勉度”を計る尺度にはなり得ませんが、我々日本人は働き者で、イタリア人は怠け者という固定観念を取り払うのには役立ちそうです。

日伊年間労働時間推移



【日伊年間労働時間推移 (OECD Fact Book より)】

仕事の進め方については、何事につけ用意周到にプランを作り、細かく進捗状況を確認・管理しながら仕事を進めようとするのが日本人ですが、同じ感覚でイタリア人に進捗の遅れに対する事細かな報告や対策を求めてしつこく詰め寄っても、“Non ho la bacchetta magica.(魔法の杖なんて持ってませんからね)”と軽いなされてしまうのが落ちです。一旦任せた仕事ではあるし、取り上げて自分でできることでもありませんから、指示した期限内での仕上がり祈る気持ちで待つしかないのですが、不思議と彼らは彼らなりのやり方で最後には納期ぎりぎりきちんとした仕事をやり遂げてくれます。そうして私は、何とか間に合った仕事に安堵の表情で部下のイタリア人の“どや顔”を眺めることになるのですが、それにしてもずいぶん胃の痛む思いをさせられたものです。



【日本流にだるまの目入れ式】

また、理より情に訴える“浪花節”的なアプローチは日本人特有のもので西洋人には通用しないと思いがちですが、この浪花節もイタリア人に限って言えば結構受け入れてもらえることがあります。筆者自身も本来ならば理を尽くした説明で、相手の納得を得なければならぬところを、そうした努力をすることに疲れてしまい、「まあ、いろいろあるんだから、そこのところはわかってくれて、何とかしてよ。」という純日本的なアプローチをしてしまうことがしばしばありましたが、こうしたアプローチを案外すんなりと受け入れてくれるのがイタリア人であると思います。もちろん、それに甘えずぎてしまうと手痛いしっぺ返しを喰らうことにもなりますが、「私の仕事はここまで」とか、「本日の勤務時間はこれにて終了」と、頼んだ仕事をほっ

ぱり出されて途方に暮れるという経験はあまりせずすみません。この点は同じ西洋人でもゲルマンやアングロサクソンの人たちとは少し違うようです。

滞りなく仕事を進めるための鍵は言うまでもなくコミュニケーションですが、「一を聞いて十を知る」ということをあまり期待し過ぎない方が良いでしょう。私にも苦い経験があります。取引先の日本招待旅行で撮った何枚ものスナップ写真を後で参加者にアルバムにして贈るために、写真毎にそこに写っている人の分の焼き増しを部下に指示したつもりが、全ての写真が旅行参加者総数の枚数で注文されてしまい、山のような枚数の焼き増し写真が届いてしまったのです。恐らく私の指示の仕方がまずかったからなのでしょうが、「ちょっと考えてくれればわかるだろうに。」と恨み事を言ってもあとの祭りです。こうした悲劇(喜劇?)を未然に防ぐためにも、こまめで丁寧なコミュニケーションはとても大切です。

「一を聞いて十を知る」ことが期待できない以上、「一から十まで」コミュニケーションを図る必要が出てくるのですが、イタリア人はとても議論好きで、会議や議論の場でもとにかくよくしゃべります。「沈黙は金 (Il silenzio è d'oro.)」という諺がイタリア語にもある反面、「沈黙は鉛 (Il silenzio è di piombo.)」という言い方もあるくらいで、“鉛派”の方が圧倒的に多いようです。

但し、次の二つの欠点を持つ人にはしばしば悩まされます。ひとつは、「聞き下手」。自分の考えを積極的に述べるのはいいのですが、とにかく人の話を聞かない。すぐに相手の話の腰を折り、相手の言おうとしていることを先回りして(困ったことにその先回り先が間違っていることが多いのですが)、また自分の意見をとうとうと話し出す。筆者もしびれを切らして、「お願いだから最後まで聞いて！」と何度声を張り上げたかわかりません。二つ目は、しゃべればしゃべるほど話す内容のロジックがわからなくなってしまう人。「この人、とにかくしゃべることが目的だと勘違いしているのでは？」と勘繰りたくなるほど、中味の薄い話をあてもない、こうでもないと展開し、最後はどうとう自分でも何を言わんとしているのかわからなくなってしまうという人が時折います。そして、この二つの欠点を両方持つ人と話をするのは一苦勞です。

まして、こちらが不自由なイタリア語でとなると、もう、苦痛以外の何物でもなくなってしまいます。

時間の観念の違いも留意しておくべき点でしょう。何か仕事を頼んだ時に、Subito!(直ちに)とか、Fra cinque minuti!(5分でOK)という返事を真に受けてはいけません。Subito は半日、Cinque minuti は少なくともその3倍の15分、下手をすともっと長い時間を覚悟しなければならないことがよくあります。「ちょっと道が混んでいて。」というのは遅刻に対するお決まりの弁解だからこれも信用できません。私の勤めていた会社でも、朝の定例会議の司会役である人事課長はいつもこう言いながら会議室に駆け込んできたものです。イタリア語に quarto d' ora accademico(大学の15分)という言い方があり、これは昔、教授や学生の 15 分までの遅刻は大目に見られていた習わしが由来だそうですが、もちろんビジネスでは通用しません。しかし、「道が混むのならそれを計算に入れて少し早めに家を出てくれれば？」と、苦言を呈しても結局彼の遅刻癖が治ることはありませんでした。分秒刻みで正確に運行される日本の電車に驚嘆する彼らイタリア人のこと、長く一緒に仕事をしているとこうした返事が言葉の絢であると言うことがわかってきます。日本でも京都時間などという言い方があるくらいですから、そういうものだと割り切るしかないのでしょうか。

何やらイタリア人を腐すような話になってきてしまい、これを読んでいるイタリア人がおられたら怒られてしまいそうですが、もちろんこのような人たちばかりではありません。イタリア人のビジネスエリートには、凄い、と舌を巻いてしまうような人たちも大勢いることは忘れずに書いておかなければなりません。弁も立つし、頭も切れる。同じビジネスマンとして嫉妬や憧れに近いものを感じてしまう人たちが私の周りにも少なからずいました。

長年イタリア人と働いてきて思うのは、なんだかんだ言っても彼らと楽しく仕事がして来られたし、

我々日本人が持たない彼らの感性や創造性に多くを学ばせてもらったということです。全く無かったと言えば嘘になりますが、彼らとの仕事の関係で嫌な思いをさせられた記憶もあまりありません。愛すべきイタリア人たちと一緒に仕事をした経験は、今でも私の大事な宝物です。



【職場の仲間たちと日本料理店にて】

(大阪大学講師、元パナソニックイタリア社長)

イタリア発月刊日本語新聞

COMEVA
Pubblinformatore mensile della Società per lo studio e lo sviluppo

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

『カルヴィーノとアーティチョーク』

第11回

堤 康徳

木に登って遊ぶ子供を、最近見かけなくなった気がする。危ないから木に登るなど親や教師に言われるせいか、それとも、外で遊ぶことが減ったからなのか。私の住む東京武蔵野市は都心部に比べて緑が多い。近所にも、ケヤキやコナラの大木が立ち並ぶ公園がある。だが、木に登って遊ぶ子供に出会った記憶がない。もっとも、ケヤキの高木に登るのはかなり骨が折れるだろうが。

私は6歳の頃からおよそ30年間、横浜市郊外の戸塚という町に住んだ。かつて東海道五十三次の宿場町だった戸塚は、1960年代半ばから、東京のベッドタウンとして開発が加速化した。里山は崩されて団地になり、田んぼは次々に埋め立てられて分譲住宅地へと変貌していった。高度経済成長期、日本のいたるところで同様の現象が見られたことだろう。それでも、小学校低学年まで、私の自宅の前には柿と梨の畑があり、よく柿の木に登って遊んだものだった。柿の木はちょうど子供が登るのに手ごろな木だった。ただし、枝がもろくて折れやすく、地面に落下したのも一度や二度ではない。

カルヴィーノが1957年に発表した長篇『木のぼり男爵』(*Il barone rampante*) (米川良夫訳、白水社)は、『われわれの祖先』三部作の第二作目にあたる。『木のぼり男爵』は、第一作の『まっふたつの子爵』、第三作の『不在の騎士』と同じく、奇想天外な空想歴史小説であるが、他の二作と異なり、少年の成長小説とも定義できる。

主人公は、12歳のときに木に登って以来、一度も地に足をつけずに、およそ半世紀も樹上生活を続けた男爵家の嫡男、コジモ・ピオヴァスコ・ディ・ロンド。1767年6月15日、コジモは、昼食のカタツムリ料理を断固として拒み、それを強要する父親に反発して、庭のトキワガシの木(*elce*)に登ったのだった。コジモはこうして文字どおり、自らの

意思で、鳥たちの王国の住人になる。コジモは、無人島に漂着したロビンソン・クルーソーのように、猟と釣りで食糧を得(ダックスフントのオッティモ・マッシモに助けながら)、生活必需品の多くを自らの手で作り出す。たとえば、ポプラの木(*pioppo*)の皮を剥いで笥を作り、それを滝のそばのナラ(*quercia*)の枝にかけて飲料水を確保する。あるいは、冬の寒さをしのぐのに、しとめた動物の皮で上着を作る、といったように。



『われわれの祖先』表紙

しかし、コジモはサヴァイヴァル・ゲームにのみ追われていたのではない。読書と研究に情熱を傾け、ルソーやデイドロなど同時代の思想家の著作を読破する。また、「隣人のために何か有益なことをしたいという欲求」にかられて、果樹栽培者に剪定の技術を提供する。あるいは、山火事にそなえて、貯水池を構築し、消防隊を組織する。彼はけっして人間嫌いでも隠者でもなく、その生は冒険、恋愛にも彩られている。異教徒の海賊と戦い、甘美な愛の営みも体験するのだ。ただし、これらの活動がすべて樹上で、つまり地上から一定の距離を保ちながら行われるのである。

コジモは、木から木へ、枝から枝へと飛び移りながら、行動範囲を庭から近隣の田園や森林へと広げてゆく。小説の舞台となった架空の村、オンブローザの一带は、トキワガシ、ナラ、ニレ、プラタナス、イナゴマメの木、松、桑、桜、クルミ、イチジク、レモン、モクレンなど、常緑樹、落葉樹、広葉樹、針葉樹、高木、低木を問わず、多種多様な木々が生き茂っている。オンブローザのモデルは、カルヴィーノが幼少の頃より暮らしたリグーリア地方沿岸部(リヴィエーラ)である。だがそれは、第二次世界大戦以前の、豊かな自然に恵まれたリヴィエーラなのだという。カルヴィーノは、本書が1965年にエйнаウディ社<中学校読本>の一卷として再刊されたさい、本名のアナグラムにあたる Tonio Cavilla の偽名で序文を付しているが、そのなかで、戦後における自然の喪失とその原因について次のように述べている。

しかしこの空想上の地理的風景はすべて過去に属しています。戦後のリヴィエーラが、都会的な共同住宅が立ち並び、セメントの砂漠となり、混沌とした変貌をとげたことによって、かつての姿をとどめていないことを私たちは知っています。経済的投機と安易な享楽主義が、私たちの社会の大半の人間関係を支配していることを私たちは知っています(Italo Calvino, *Il barone rampante*, Oscar Mondadori, 2010, p. IX)。

このような風景の破壊は、経済ブーム(boom economico)に沸く1950年代、60年代のイタリアにかぎらない。同じことを、私たちも日本の高度経済成長期に目の当たりにしてきたのである。

カルヴィーノが『木のぼり男爵』のなかで、失われてしまった自然豊かな故郷の風景をよみがえらせようとしたのは確かだろう。興味深いのは、この作品で、リグーリア地方からフランスを抜けてスペインにいたる広大な森の廻廊の存在が示唆されている点だ。おそらく、カルヴィーノが夢想していたのは、一枚の葉のなかの葉脈のように、樹木が陸地の隅々にまで浸透し、木を伝ってあらゆる都市にも海岸線にも到達可能な、通路としての森林に覆われた世界のイメージだったのではないだろうか。その裏づけとなるかもしれない箇所を、小説のなかにたどってみよう。『木のぼり男

爵』第4章は次のような一文で始まる。



【トキワガシの木 (12/09/20 wikipedia より)】

ほんとうかどうか私(筆者注:語り手の「私」は、コジモの弟ピアージョ)にはわからないが、ずっと昔、ローマを出発した猿が、木から木へと飛び移りながら、一度も地面に触れずにスペインまでたどり着けたと本に書かれていた。

さらに、同じ章のやや先には、以下の一文がある。

コジモは理解した。木々がこれだけ密生しているのだから、まったく地上に降りることなく、枝から枝へと移動して何マイルも移動できるはずだ、と。

そして実際に、第17章では、樹上に追放されたスペイン人亡命者たちに会うために、彼らが暮らす内陸の村まで、2日間木のうえを歩き続けて旅をするのだ。

これらのくだりは、自伝的な作品を集めた短篇集『サン・ジョヴァンニの道』における、カルヴィーノの父親マリオの記述を想起させる。コジモには、マリオの姿が投影されていると思われる。農学者のマリオは、鳥の鳴き声をまねるのに長け、動物の道を知り尽くした猟師でもあった。そして、「犬か銃さえあれば、ピエモンテからフランスまで、森からまったく出ることなく」たどり着けたのである

(「サン・ジョヴァンニの道」)。作家となった息子のイタロが、「壁と文字の書かれた紙の迷宮」(「サン・ジョヴァンニの道」)に閉じこめられているのは対照的に、マリオは、ロビンソン・クルーソーのような「自分自身の主人」であった(「公認のゴミ箱」)。

『木のぼり男爵』最終第 30 章では、コジモの死が語られる。カルヴィーノの作品において、少年時代から死にいたる登場人物の生涯が描かれているのは、この小説だけしかない(Mario Barenghi, *Calvino*, Bologna, il Mulino, 2009, p. 39)。王政復古の影がヨーロッパを覆う時代、65 歳になったコジモは病にかかる。弟ピアージョの説得にもかかわらずコジモは木から下りることを拒む。死期を察した彼は、イギリス人飛行家の気球が南西風に運ばれて飛んできたとき、錨を吊るすその縄に木からジャンプしてつかまる。気球が入江を越えて対岸に着陸したとき、すでにその姿はない。湾上を飛行中にコジモは姿を消したと推定される。一家の墓には彼を記念する石碑があり、そこには、スタンダールの墓碑銘「書いた、愛した、生きた」さながらに、こう刻まれている。「コジモ・ピオヴァスコ・ロンド——木々のうえで生きた——つねにこの地を愛した——天に昇った」。

そしてこのあと、コジモの死と連動したかのような、オンブローザの森林の破壊について言及される。

私の兄が死んでから、木々はもう、もちこたえられなくなったということなのか、あるいは、人々が斧をふるう狂気にとりつかれてしまったというこ

となのか。

森林の破壊は、植物分布の変化と、在来種の消滅をも意味する。ピアージョの語るところによれば、コジモの死後、トキワガシやニレがオンブローザから姿を消し、在来種のオリーフ、松、栗の木は高地に追いやられ、海岸部は、ユーカリやヤシなど、オーストラリアや熱帯原産の木々にとって代わられたのだ。

カルヴィーノは、『木のぼり男爵』と同じ時期に書かれた小説『建設投機』*La speculazione edilizia* (初出は 1957 年『ボッテッゲ・オスクーレ』誌)のなかで、自然のただなかに生きたヒーローのコジモとは対極的な若い知識人を主人公に据えた。両作はその作風も対照的であり、『建設投機』のほうはリアリズムを基調とする。小説の背景は、次々に新築されるアパートや別荘が昔ながらの風景を一変させてゆく 1950 年代のリヴィエーラ。主人公、クイント・アンフォッシは、母親が植物栽培に使っていた一家の庭の一部を売ってアパートを建てるのだが、事業は暗礁に乗り上げる。クイントは、いわば、建築ブームに身を任せて挫折するのである。

(翻訳家、慶應義塾大学講師)

… 会館 だ よ り …

イタリア語 無料体験レッスン

10月より開講の秋期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア京都会館

10/ 6(土) 11:00~12:30

10/ 6(土) 13:00~14:30

10/ 9(火) 11:00~12:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

10/ 1(月) 19:00~20:30

● 梅田：大阪駅前第4ビル

10/ 5(金) 19:00~20:30

10/ 7(日) 13:00~14:30

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

日時：10/ 6 (土) 16:00~17:30

会場：日本イタリア京都会館 本校

講師：当館スペイン語講師

ポルトガル語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

日時：10/ 5 (金) 11:00~12:30

会場：日本イタリア京都会館 本校

講師：当館ポルトガル語講師

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>